



養心集





明



陽

葉十

長一あゆみの形著るる。本注具人の地好く  
ハナシルル。野々山草花なり。



冬の日

此卷一部の非かいつく冬の日と  
よ古言と題ハ一部の惣標ニシテ朱注冬の日ハ意門の  
万葉あり春の日も冬の日も落布れとも霜のふもそあれてハ秋時分ハか  
くハまらちまたと許六日冬の日ハ次韻の風調ありておほよその人解すへ  
きものゝあはれ。霜ハ去婦を法華を用いぬ。

竹まき長途の雨まぶらひ紙衣ハとまらりくのおほ

くしも免あり皇と紙衣と長途ととまらりくおほらひ信つくしたる

まひ人公羽ハ自らを云我信の字眼十へありまよおほえはるやそ昔

狂歌の才士竹斎をきす知若神と書本け國業ハ送るて狂歌をよくすたさしる

をふ思おもひ出申ける

狂言ちねしのぶに竹抄似たる

芭蕉

成美曰字略しるるハ秋時代の格調を狂言の二字ありてハ風俗あり貞亨  
九年尾陽子卦ありての時之狂言の二字ハ竹抄ありて別ありあへき











五芳よふおへん人ちんそこの野水

前二句は沈むるれ柳よあけを坊は定め常ともやうさつけちんそこの

多岐のれを橋子ぬるむる月おそ 杜國

其のむらり橋多るあむる三日月さきへくそこの日の解るあ前

とあつたかき町さうりける 重五

ナラ〜キナワの〜カ〜月をさるも町中さりか〜雲井の月の静

けさ〜おまひや〜と〜り〜なる人のほほ〜又梅するよ神代巻

二の尾の近衛の花のすかむく 野水

二の尾ハ一鴈ニ觸りしあか〜その二の尾ハ宿下を訪んらる付近衛の花

さうりを尋ね〜あ〜まはあ〜

蝶まむら〜を〜白井りむ 芭蕉

二の尾のさき〜そのは〜むら〜し〜か〜り〜て〜あ〜れ〜を〜て〜わ〜う〜と〜

十蝶は律をた〜と〜を〜し〜て〜鼻〜あ〜む〜と〜〇年注在鼻日涙在眼白涙〇声を

発せぬハあ〜た〜眼〜あ〜り〜ま〜き〜の〜め〜い〜あ〜た〜鼻〜す〜り〜出〜る

けり物子心廉遠顔あつれる 重五

其人のつけ〜て〜蝶〜む〜ら〜ら〜と〜さ〜る〜ま〜い〜は〜ま〜ぬ〜奴〜を〜上〜鴈〜の〜書〜と〜そ〜つ〜け

多〜す〜ゆ〜決〜す〜く〜り〜は〜雁〜さ〜ら〜〇一〜句〜の〜ま〜は〜ら〜あ〜

いまそ恨の矢をそらつとま 荷兮

変化の所〜る〜春の懐遠の〜君の仇を報〜ん〜お〜ま〜つ〜け〜ね〜む〜ひ〜あ〜と〜何

〜て〜前〜りの〜蝶〜物〜の〜中〜あ〜る〜人〜の〜あ〜ら〜ら〜ら〜ま〜廉〜す〜と〜い〜ふ〜ら〜り〜い〜そ〜あ〜ま〜忍〜

〜ね〜ふ〜曲〜もの〜あ〜ら〜と〜又〜定〜めて〜今〜を〜恨〜の〜矢〜を〜放〜つ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜

ぬすくの誌念の春の吹あひて 芭蕉

矢を放つ〜ま〜ら〜ら〜前〜日〜つ〜ま〜ぬ〜い〜と〜そ〜て〜吹〜を〜あ〜ひ〜て〜















あしひき

奥のきこえをいひあきまぬく 桂水

又冬の日解より田標をみて世を語りくをほしたまはしんべい奥のきこえ  
みす左近の人をみるべし。朱注実方朝臣の北の方ととの仲や

床みけて語まはしんべいあきまぬく 荷分

前々の人を女と見てたるといふ事あると云ふつとめする女つて今その客  
田舎の客つて物もし、事をたつていふ事あると云ふつとめする女つて今その客  
舎の客つて幼き時別まし、日性の親類あるべし

狐さきまのけの眼のこり 芭蕉

千眼一到の坊の妙なる其の所をその内なる病もいへばあはたさ

口をいへば痛をちきるちのふあき 野水

此の狐さきまのけの眼の病ありけりいさけうとて。お城、他のけ  
これい自つてお城の病ありとて。懸るるふすべいお城、他のけ  
痛にこり、皮肉腫れ起し、不癢不痛又堅強ナル者。朱注弦的も漏れまはし痛を又  
あしひきてまはとあり

明日は加多きよくひはせし 重五

一轉してお城の病ありけりいさけうとて。朱注防戦の術も尽きて明日は敵の首  
を送りしんべいもお城の病ありけりいさけうとて。朱注防戦の術も尽きて明日は敵の首

小三太子をいへばいさけうとて 芭蕉

江戸の氣象さめありへし。水滸傳にカフ口をのそみねたりし。朱注右  
残の酒真ま小姓のわ三太子をいへばいさけうとて。朱注防戦の術も尽きて明日は敵の首

月つと輝かき牡丹池 杜園

変化の所として風雅の庭前の牡丹をいへばいさけうとて。朱注防戦の術も尽きて明日は敵の首  
朱注酒真のまはとあり

緯あまねかハヤふき聖殿 重五

爰に牡丹の坊の所として牡丹のつけあはらばあきまぬくを附へきまあり  
家と附しんべい千眼一到の妙なる変化ありて又世の变化もかくの如く

あつとち地蔵切所 荷分

前々の坊の用之位居候し、所もつとち地蔵切所も音淋し、まはせたり

初もふせや嫁のいさけ 杜園

是の地蔵切所を通る人の中より花あをいさけ、あきまぬく、訪の湯場



替いのきし坊を思ひしりし月し時之初花のせり花よのころこのまは  
観想の夕に子を失うる人ありその行状をえたりやまめりのいそがしく  
いそ観々又不畏ま

おろろいころの春そかひゆき 野水

先わか女の惣若之附心嫁の面をえて遊んで居るをえていころま  
るそかりゆりみじやあましくあやの子大まきうしてやうて嫁のあま  
とて花のさういめしうひま

櫛とこま降すころのあまの荷今

先とよを扱ひして傾城の園と附ころ降すころは正方ありへし静あゆ  
ころしを起上残場とゆして 芭蕉

是は前月の園と附ころをそ附ころ又く静せんとおひあまハ静の外は火を  
ゆしとまあゆゆの雪の元且も志らばある心をあまかしくころ園の雪  
眼をこ執中と静あまの園へ籠まうころ

竹條ありく指ハ指の暮すし 野水

三線かゝん不破の園人 重五

前日あはれはる体あはれハ不破の園と場をきめたりと三線かゝんハ風犯人  
のとの娘もあはれ

及まかぶ美濃ておれる其名を忘る 芭蕉

前月の風犯人ハあまのそとめす不破の園とハ三線かゝんあまの身  
又美のそとハ甘香を打これと静あまの境をあらわたり向かまめと

おすめ 七十一 杜因

物あまのりしつと静あまの境とハおすめとちまめとあまの境とハ静あまの境と  
七十一とあまの境とハおすめとちまめとあまの境とハ静あまの境と

奉加めはは静あまの境とハ静あまの境と 重五

前月の人十人けの心をせしめてあまの境とハ静あまの境とハ静あまの境と  
と静あまの境とハ静あまの境と

いとつの人衆の下奉りさし 可三以

前月の心をせしめてあまの境とハ静あまの境とハ静あまの境と  
と静あまの境とハ静あまの境と

蓮池子詠唐の子遊ふ夕まき 杜因







志のかみいさむを誠の獨活亦 荷兮

冬の日解ニ爰ハ其程トシテ今トシテ其國々の産物を貢奉る体ヲ附たり  
誠の獨活外ハ貢納の熟語多ク一且其あけり形ハ祝言トシテ堅代の  
ヲを附ルル志カカシイサハ白壁の老翁トシテ貢奉るある一  
又獨活亦明神ありこの二神中ありヤシモ其ハ神軍あり焉白神ト  
を好むトナリテトカウハトをト外テ白神ヲ献ハ初レト云フ

つ元をいく事僅み十歩

年注志くぬのルキキを一句ヲ光ノを云ハナシト歩ハ以テ走ル歩  
エハアヤナリ

つんて月とあすさる社國

つんの十歩のあい多ク空のそくきのありさまうつかりる風をのへて  
カ若キ愛のせの中を祝ハナリ

こゆるあし行ぬのいまつま 重五

老るぬのつまね靴のぬ氷の上とちとカウツツらんしきい  
つまねとておぬの風をのくこつと移つまにまを運つらん

止蓬乃木の多を初狩人の矢も負て 野水

亦三冬ノ日解ト解ニ曰ク乃多ウツツミテ大ニ獲ルをアツテ至テ觀  
まきとすして狩人トツケル甚クもきありは狩人を求ムカ  
まよてしるる時ハ感慨ありハナレバ市人の初商を祝フ  
獵師の初狩をこゝろカキテ蓬奈の多を胡麻ウツツカケ  
ふ其すくたあ多の画のぬハ年注結句あれハ上の意をす  
初狩を祝フテ蓬乃多を切腹カケ

北の御門をいあけの春 芭蕉

年注其程の北の御門ハ通用の出入口あり南門ハ紫宸殿の前  
ハ開のぬト又其官公吏の狩を執ると見まして又初春の意もの

馬糞捨あけき風のおもみ 荷兮

前年のやいあるよむきもれをとも入るをいさ  
り風のあけきみとつけらる者無いとんか  
あまよ竹本をめぐりて馬糞をのり

茶の湯者をいむ地辺の南公英 正平

掃除といふまきいすきを見か茶の湯者といふけし  
不淨といふれり茶の湯者といふけし  
らるるけよねも腹くつきて 重五







あるを内命婦より私の妻をも命婦とす。それを外命婦より小宮時  
も禁中より侍女房の中より内侍より次子下としてさふり。其の中より余ふ世蔵  
人としてあると右御方抄よりつる。老又命婦古事記傳より

まがきまて津波のおまゝるま行 荷分

前月を指して禁裏より此後救ひ来とつけり。永注大伴王子事と

佛喰ふ多魚解 ハト 芭蕉

津波の天彦は太魚の厨あり。解字ハハカ判牛角會意  
江ノ中より井の佛は太魚の腹中よりあり。解字ハハカ判牛角會意  
〇年注譚州志度の浦長田の作平惠堂上人のすめよて一心念仏の行者と  
あり。武時志友の浦津波にておよをもある鯉の腹より惠心の作の法陀を傳ふ

縣 みるも魚見次郎と仰かぬて 重五

大魚をいそぎて魚見次郎と仰かぬて。重五。日向國よる何  
郎即ちやうやく。此人花見好あり。を國よ海流を魚見次郎と仰かぬて。名を  
告のこころよあり。此れは魚見次郎のこころ。魚見次郎は魚見次郎のこころ。  
注も又此れを重五。此れは魚見次郎のこころ。魚見次郎は魚見次郎のこころ。  
こころの世の五形草の自由 六も 及見也 杜國 子

爰に世の盛衰をのべておろろろを。こころの魚見次郎もかこころ長  
してあめ御五形草の生い。こころの永注其人の地所

こまきしや 嗚る雲雀ちり 芭蕉

五形草の咲梅ありあめつ。の晴うありル

志倉の馬の福ふに白あり 野水

元と其馬の所。生れと生れを所より身ハハカ。馬のうて  
り。こころの對つてあり。こころのねあるねある。ハトムロ

おのこまきや 矢矧の橋のまのまが 杜國

馭路の馬の福ありゆくとを。の長さはあり。うふこころ。橋の長さは直  
展。あるこころ。こころの口を。はらう。日本武尊東征の時矢を矧。奉  
る。こころの長橋長さは百八間

庄屋の虫をよみて送らぬ 荷分

冬の日解より前月のヤウふとを。のめて。下のね哥と見えて。送らぬ。その  
あふりの社や。年かえり。松よするね哥を。送らぬ。その  
も人。永注矢矧の里の社や。松の松あり。古子保の娘やける



捨し子ハ余ヲ長子のひつらん 野水

人の松のひさしき亭をまいて我う子をわひひししに能性の所こ。余注：  
老松のつもあつてあつ我子のつるを自づから

晦 日そそそく 刀喜る年 重五

晦日ハ大世日ううて子を捨しりあう消人の迷信を所く捨しりあう何  
ふりやあふんいつの年七かろまわささよも

雪の狂吳の圃のせきめつじき 廿何分

此夕大いし轉して前夕主人附り客の狂人凡狂人の訪い来るよふ  
てをうらふく力を委て酒を穿れ人の文し。余注：雅人のといまうさ  
ま。惠宗の詩、宜重吳天雪、水輕楚地花。

襟 ころ雄の片袖そとく 芭蕉

家からうやまも雅人よ遊女の對り之高雄の片袖をそく人も同じ雪見の  
狂人よさての言ハたつゆれ遊女の袖をみつきころまらわらも曲もの  
あり吳の圃のせきま著れ人あつとや。吳圃の宜高藤三朝野望集地  
まをふりし。余注：雪見の風狂人。片袖を切て襟巻。あつてわら

あふくと捨を捨し 春のさ人 重五

爰ハ揚やの大さきまきと附しりうさハ遊女の袖を蒸しころ大老大捨をそく  
ていさ春をせん花あハ水捨捨としてくもよと。余注：揚の体あり

菘子のひとよ名をこねし禪 杜國

こつハ高秋教の一爰赤りを花と安ししある其傑をえてあまあう傍る  
ハゆらハこのぬとこころ。余注：禪師は轉して一休禪師の末ハ成道  
あふさる時艶書とそく菘子一捨をそへて。本来の面目坊うますうた一目  
見しよらあひとあうら

三日月の東ハ暗く 鐘のちり 芭蕉

のもしりこるしの言をりあうり入相の鐘と附しりこれハ菘子のちりあき  
よ。余注：風運をあらわしをあるこま。くくくくと。一りの他

秋湖のすこ子琴うり 者 野水

前の三井寺あうて湖あを附しり心ハ琴をかへすものハゆれそやゆり  
し。余注：か。前のの。く。く。く。の。湖。ゆ。ら。を。の。解。ま。ら。た。く。く。く。あ。う  
つりの。あ。あ。あ。も。む。く。く。く。の。思。な。これ。の。情。の。あ。あ。の。對。り。あ。う  
の。余注：秋湖ハ三井寺を。琴ハ。す。同。節。を。彈。う。あ。す。琴ハ。林。正。人。心。

烹る事をゆるしそを放りる 杜國



ハゼハ沙奥之是より秋三日ニ年注琴の清音をゆて釣たはさを放つてつ  
ねとあはしよし冬の日解くとこもあつた

静よき念仏教をへねつる 荷兮

年注何よりいさを放つそとつあは強弱ある念仏のよきをゆてつこ

不けうすす行燈けしよ 野水

是は前りの念仏を聞かち人之心ゆきまよくついはるをくつねすすこ  
りよそ静といこくまもあまあぬれ能信てと上よのよきあ

かというよつねの草川 重五

ここに行燈しよよりあを聞かちあてを信て行燈しよ能信てやうか  
あまよきあを信てつこくまもあまあぬれ能信てと上よのよきあ

あかぬれ花をまじり花のかけみ入 荷兮

前りの花のあまを信てつこくまもあまあぬれ能信てと上よのよきあ  
あまよきあを信てつこくまもあまあぬれ能信てと上よのよきあ

その守り目と我もおろしく とき成

此の西上人の辞世をつんでこつ一意に我も同じくつりよるつりよるつりよる  
おろあふし心書うだに難有以戦國の氏あつたやうに不認おつてあまを  
とこの年注西行上人願くは花のたつて春たつ人其が月のを月の頃

ねあ波津にあ火焼家ハすきあぬれと

年注万葉集よ人丸難波津にあ火焼家ハすきあぬれと

炭ま天のおつ月こそ黒かめ 重五

秋の心におのり毒こそ黒かめや黒くにああははとゆくらにこそこのやハ  
のてあはをそまきこころ口黒かめあつて外のものハ白からうの毒をか  
りハ黒いばらうとあまこつこつあつてつとやとあつりの信をくんで  
つとつらうと

いとねねひを浸磨石言 荷兮

昭ハ職人たるを極向よとつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

花菘馬骨のやま子 杜因







前より情を起してこころのまはれをばかしくもあはれり夫れ日別れ多き女禁じ候へ  
居たり侍たぬ大なるつらき事なりしあはれ人をせんといひ前分は  
てくまるとりあはれもまはるるあはれはる女あまことかへりしあはれ  
を冬の日解はれ他の四つはなほあまことかへりしあはれ

川守はあまの子をうりて殺る 重五

自家あまは海を渡りて自れもあまに  
守のぬをばかしくもあはれりしあはれ  
かむりしりこをばかしくもあはれりし

血刀かゝり力の晴る子 荷分

家中の若ものもこの口端をうりてあまをばかしくもあはれりしあはれ  
しるき附あつた力のつらき大なるもあはれりし

あつて本御の鐘をきく 牡丹

前より武家のまをばかしくもあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし  
あはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし

あまのまのりあはれりしあはれりし 野水

これに全秋の附して感のたのしみ

花の注 櫻の懲とすつらなる 芭蕉

此の解し加はれ大鏡とたの解しつらなるあまのまのりあはれりし  
あはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし

僧ものいふに秋を香 羽竹立

前日の花をあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし  
あはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし

白燕濁らぬ水子羽を洗ひ 荷分

山吹を腕中しそあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし  
あはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりしあはれりし

宜吉かしく 剣を 重五











雲月や鶴カウのイ々あふひめて

荷兮

後月冬枯の子はまあふさいし言外ありの情を漫筆に去月を雲月といふ  
事筆意内停るるへか目書に去月を雲月と書けりあて雲月といふ書けり  
雪月といふ書く人ありと云ふ年注鶴鶴亦夜鳴又蛙抱也鶴抱影

冬の朝日のあけぬるる

芭蕉

白くくしよ日る月のちかみ此賦に詞をいふ俳あし夜分をくけて一首の  
かくはまゝいふ俳くくしよと云ふ年注此一集の妙は此賦ハ余情をくか多  
く冬の日にしよと題も是れが附くものじやと云ふ又詠をすするハ秋もは  
けをまいてしよと首うちをさした鳥うしろより朝日の影さしたるん情を

櫻捨山家の体よ木の多き降

重五

第三のるや三の節りよ父字の定りたるもの一ハのさま此れハのやうあれと  
も下のとまゝな奴もて次のハ乃すへきたれぬ此理をいふ時ハてとあふ  
とめあふとらへてのハ第三のるをいふは山家の体と云  
ふて第三のるハ年注田家より山家の体と云ふ又木の多き降ハ人  
あつてあふとらへ

いさすくしは捨るるつ

杜國

四月月前カ山家の体と云ふはつとらへてのハ乃すへきたれぬ此理をいふ時ハてとあふ  
とめあふとらへてのハ第三のるをいふは山家の体と云ふ又木の多き降ハ人  
あつてあふとらへ

音もあきし身もよ月のうらみ

羽立

附心ハ此修家より武田勢を塩賣りたる仲ありへと云ふ年注前カを陳ヤの糧塩  
と見て之風俗通曰呉ノ地ハ南の果よりと見若鳥ハ牛の熟は若む故月を足すは喘す

酌とら重甘園切りみりて

野水

酌とら重一説おうち酒もりとも又前カ花城のさまあれとも音もあきし  
是とらあを足して太早の法也と評て祝いと附まはちりしと云ふ  
冬の日解酒研やおいなるを甘園也と雅奥を注するいとめて

秋のころ旅の店連歌いかり

芭蕉

酒宴の奥は甘園といふはやいさるさまを上篇の旅と見て附く。大女も  
いとかりと云ふいとかりと云ふのあふ

漸もまきて留すんわらる寺

荷兮

前カ旅の店連歌と云ふは清見寺のあふとらへてのハ乃すへきたれぬ此理をいふ時ハてとあふ  
とめあふとらへてのハ第三のるをいふは山家の体と云ふ又木の多き降ハ人  
あつてあふとらへ







笛は花を吹拂すまいと脚をのけりて。朱注多し衣は公卿の因ふ

籠樂ゆるは木尻の山あい 野水

前月を押出して附くは、此こころに、年こころありて、木尻の山あいに、景情を、  
ねるあり、あいに、間こころあり、あいに、阿比、郷あり、朱注、籠樂ゆる、ハ  
録こころあり、出しまつ、さして

舟を見てゆき、泪くこころちかへり 芭蕉

前月の左近の人、地晒の舟を見て、我も如、杖尻と、腰地、ささる、せん、う、こ

乞食の甚衰をもくふ志のめ 廿何分

冬の日解る、ハ、樹下、石上、を、栖と、あ、た、雲、水、斗、粒、の、喉、并、と、併、こ、と、注、く、あ、れ、と  
下の、朱、注、あ、る、人、の、朱、注、戦、場、の、傷、と、見、て、その、人、を、由、緒、の、ある、器、情、を、  
乞食、の、こ、の、ま、ら、う、て、つ、み、か、る、人、あ、る、と

泥のうへに、子、屋、を、引、籠、を、控、ひ、得、て 杜鵬

前月の乞食、こころあり、は、世、控、あ、る、人、に、控、ひ、く、と、に、あ、る、人、に、控、ひ、く、と、  
但、こ、こ、ろ、の、ま、ら、う、て、つ、み、か、る、人、あ、る、と

法華子、ま、ま、む、お、の、こ、く、す、り 重五

泥のうへ、魚を、得、り、ハ、何、持、つ、は、な、し、て、泥、の、い、く、ま、は、曲、ま、り、頭、を、毒、を、解、  
す、は、な、し、を、ま、ら、う、て、ハ、化、も、多、く、こ、ま、注、川、狩、の、ま、ま、ら、ん、の、又、養、老、の、遊、あ、り、の、仲、り

は、こ、ま、ま、る、年、の、小、雨、雪、の、ソ、花、も、ら、い 野水

水のは、な、ま、り、と、ま、ら、う、早、魁、と、し、て、珠、ま、ら、う、と、ハ、夏、日、長、悠、民、と、し、つ、時、節、あ、る、人、  
ハ、夏、日、早、捷、の、田、家、の、幸、若、を、憐、れ、む、は、な、し、を、ま、ら、う、と

萱屋、ま、ら、う、ハ、炭、圍、つ、く、白 羽竹

會、款、の、附、こ、け、の、花、を、し、つ、子、片、側、所、あ、り、と、こ、こ、ろ、の、小、家、は、夏、は、は、は、の、花、圍、つ、  
く、と、ハ、小、家、の、日、あ、り、と、こ、こ、ろ、の、見、こ、こ、ろ、の、け、ら、う、と

芥子、あ、ま、の、カ、坊、交、り、ハ、お、む、ま、し、て 廿何分

の、も、し、り、た、ら、ん、つ、ら、あ、り、の、の、小、家、あ、る、と、こ、こ、ろ、の、小、家、の、越、し、た、ら、ん、と、  
孝、尼、ハ、十、丈、下、の、か、な、や、き、を、カ、坊、と、し、ハ、園、中、の、通、言、に、親、氏、あ、る、と

を、ら、う、は、違、つ、実、は、ら、う、も、し、の、実 芭蕉

凡、ハ、カ、坊、と、ま、ら、う、折、る、ま、ら、う、と、柏、を、附、こ、こ、ろ、但、夏、ハ、大、寺、の、庭、前、ハ、附、こ、こ、ろ、あ、る、と

老、つ、ら、う、ハ、取、其、堂、の、そ、く、月、の、茶 重五

前、ハ、寺、の、庭、前、夏、ハ、寺、の、内、庭、と、附、て、ハ、冬、を、ま、ら、う、と、  
返、老、の、そ、く、と、附、こ、こ、ろ







追加

羽竹立

このまゝよと新面うしむうつ 七散

牛の餅きものふぶ敷の列りききと詠向として仰りしもの心重荷を附たり上り牛飼多敷くぬれ又あしきま打る不照さいつりまをよと下知しつるこまほ肉をくあまのいりりうしては草をくふもめか方つがく思ふあ

杉史子あふるかまいらの虫 荷介

牛道ふおのこも赤集うてあしきうら日のさきとほく体もたて附う心い牛荷よりしむをよあふんあまきふんその僕もて所の三葉あし北風をしのくまをいいて多敷あまをいりめくりかぬりつる虫りその坊より○まほ牛に金部多敷は体もたのあれはそこの人ほまの内のくまら体も又あまをいりめりてさあまをくもつととすうりし土俗七え火をさして杉史とさうりしや

とくさすか 七まの 杉史をちやせんで 重五

以白い紙の杉史あふりしを庭燈或は火焼あとの神事とて神いさめの能と附し本賊外に猿巢の番組るまへしう九下急な杉史を茶葉してと此まをむもろうつと○まほ本賊外に他体こと

梅竹まの宮をやつり新露 杜園

寝る能のうつりま古雅ある体を経向して梅竹まをやつれと仰りらんわさし宮方の梅旗かすして供物のくあまけあも梅宮をうつして仰あまの梅ままあまやつすしうらまへし

銀ま 蛤らん 月ま 海ま 芭蕉

梅宮の供物を附し銀ま蛤らん月ま海ま只この詞をあまききその一向のまやいりるまま前の方つりまをる人朝あまをりつあま力海と仰りしうらまて梅月のまありしとて海辺の曙このまき見えぬ乳敵のたあましそかろををあし奉る軍書の体も多人し梅銀ま蛤らんあまい人まあまはま○まほ大塔の宮あまの海海海と見えし

いりまの梅をすりぬは阜山 野水

梅の梅辺の能をよもてそのまをあかきまねる附こまほ葉右の燈籠をえりてたの梅をすりぬは阜山とこ表をめりしときハち所地名をすす蕉門の一格こ

附言太山杉形の事 平らうまきまぬ仕方あり



此字本の事記す書きてありき

平流布の印板の假字のたのへるをその流く今改め板  
本のあやまうを多すけて今本をうしめし不事ありき以て  
しへぬのうまうして改し

一寸くハ秋ちうさくうひくしきんもてうきこぬハ  
多かへるこしおぬかぬれとまねのちえん人よくたし  
てよ

一おのしうしきるふいんはうく老ぬハちうさくハ  
ものさるうハあもねとすてししうまひのたぬま  
一慶享甲子の年と板とあり今茲明後四年未年より  
百にぬハし年とぬハ春の日の巻より二年先ぬれと春の日  
の標題よりりて有あくの序よりぬハ冬の日の上より  
多かへる人

附言

一七部のしふあうして三ぬかぶよきりともしぬしよ  
きをよしとしとらきをまろきとすぬめたるんこそま  
らひのたぬまもあもめ

一七部集異本さいぬれとも元禄土年寅の年書肆つ  
や秋を結りたりとる大本を安永年間曾尚堂子周とい  
へる書肆小本よりつしかへたりとる世よおこあはる  
を今ちうさくをくハ一つ

一七部集ちうさくの全き本見あたらぬ但し藁太の冬  
日解誰まや有ん七アさくし棚さうしぬかあもし  
あるものあり志ぬの何れ七ア集大鏡とふみをか  
きて元のいさを大いぬれともこれも何このさうさ  
くまかあはてまふハのたよりまハまらしともあも  
りきぬことの人の多かへるもあやまぬるもあうとか  
はゆな各成章んてまも抄をえりまけ人のかきたる



七部考あるよししむとつまこゝるあり

一 かの巻をこがまししくもこのちうさくかきこゝ人笑へ  
のくやこへあれともかこ一まありよくもあまあしく  
もあまあしくつけつゝさてのちのよき人をまつのそ  
いふしつゝかゝるものかひもあまありのふもてハ  
またこゝるをへるこゝるこゝるこゝるこゝるこゝるこゝる  
ろをかのみこゝるあまをのせもきんもてつゝあてとま  
くくへきすへて初まものするハ後の人の 神子ハこゝるこゝる  
あつまこゝるこゝるこゝる

一流布の印板の假字のたうへるをその處へ今改め板  
本のあやまりをたすけて今改めうたかふるまうま  
うへへのつゝよよりて改めしそ  
一すへておちさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
へることおちさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
よ

一 おのれこの志するるハ人よよくあれハちうさくさくさく  
のく益ありあふますへていもうまひのたれまふん  
一 冬の日巻ハ貞享元甲子の年と板とあり今茲明次四  
辛未より百ハ於八年サレハ春の日巻より二年先を  
水と春の日巻の標題よりよりて月ありこの序よりハ冬の  
日の上よりしちうさくさく

冬の日	貞享元甲子年
春の日	三丙寅年
曠野	元禄二己巳年
艸	三庚午年
猿蓑	四辛未年
炭儀	七甲戌年
續猿蓑	土寅年

義仲寺翁塚  
芭蕉翁ノ三字ノ石碑ハ其時僧丈  
草カ筆ニテ其角去来ノ筆建又ト  
カヤ廟ノメクリノ石牆ハ百川法  
橋経営ニ行状ノ碑文ハ甬上老人  
彫刻ス芭蕉堂ハ蕉翁八十年ノム  
カシ蝶爰造立ニ粟津文庫ハ百年  
ノ今折風成功ス右蝶爰ノ記ナリ



公羽、諱 臨濟 正傳中 奥也 蕉翁 閑禪 長老 大禪師

正保元 甲午年

伊賀國上野松尾年左工門ノ子息 藤堂家 中

寛文三 卯年

翁二十歳 京、出ル 松尾伴七ト云

延宝元 丑年

一三十歳 此間宗因風ノ俳諧一説泊船堂宗房ト云 又北村季明ノ執筆ヲ東都詠キ桃書坊ト云 深川ノ住 古池ノ吟アリ

天和三 亥年

一四十歳

實正七栗 冬ノ日 春日 野晒能行 甲子紀行 曠野集云

貞享元 子年

一五十歳

奥州北國行脚 奥細道 比左古猿三ノ深川集

元禄二 巳年

一六十歳

元禄七 戌年

日年

十月十五日 難波客舎ニ於テ 終意 粟津義件 寺ニ葬ル 燒香三百余人 晋子 終焉 記作 十月十八日 於義件寺 追福 俳諧 四十三人 満堂 大津 腰所 京 嵯峨 根津 伊賀ノ連ナリ

附言

一七部のしふまゝとて三つあからよきやとてしるゝ所多し  
よきをよしとてしるゝ所多しとてしるゝ所多しとてしるゝ所多し  
此、五部ハへのたれももあらぬ  
一七ノ集畧亦ハあるも元禄土宿の年書肆みつ  
つや此集の



陽  
拾  
第



卷之三十一

